舞台『ハリー・ポッターと呪いの子』

舞台手話通訳付き公演　満員御礼！

＜カーテンコールではキャスト全員が手話でご挨拶＞

舞台『ハリー・ポッターと呪いの子』では、聴覚に障がいのある方にもお楽しみいただけるよう、2025年5月に2回、舞台手話通訳付き公演を実施。両公演とも舞台手話通訳対象席は完売しました。

【対象公演】
2025年5月17日（土）12時15分開演
2025年5月24日（土）12時15分開演

舞台手話通訳者：田中結夏（1幕）、江副悟史（2幕）
手話監修：森田明
コーディネート：株式会社momocan、となりのきのこ、株式会社エンタメロード

■サポート内容について

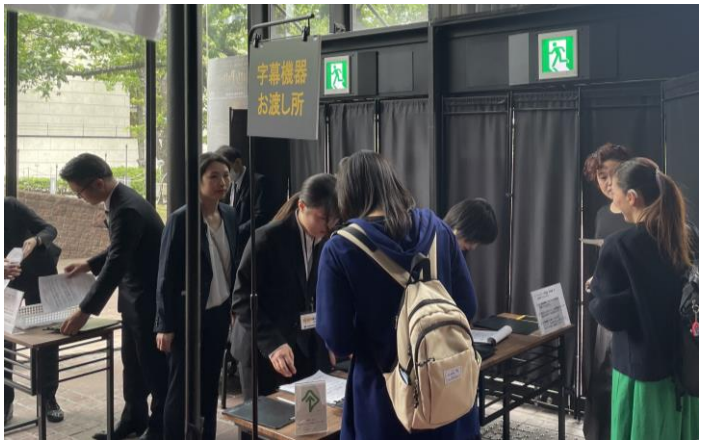
ロビーや客席でも手話通訳スタッフがご案内をサポートし、場内アナウンスの際も手話通訳を実施。字幕機器の貸し出しスペースも設け、筆談ボードやコミュニケーションボードも追加設置して対応しました。

本番中は、舞台に向かって左側のエリアに手話通訳対象席を設け、客席エリアに設置した台の上で舞台手話通訳を行いました。通訳者は実際に本番でも着用している衣裳のグリフィンドールのローブを着用。緻密に構成された舞台手話通訳で、聴覚に障がいのあるお客様にも舞台『ハリー・ポッターと呪いの子』の世界を臨場感たっぷりに堪能していただきました。

また、舞台手話通訳対象席の一部に設けた‘抱っこスピーカー使用席’では、持参いただいたスピーカーを音響機器と接続し、音の振動も楽しんでいただきました。

カーテンコールでは、ハリー・ポッター役の吉沢悠が手話で通訳者を紹介。そして、最後は出演者全員で、手話で挨拶しました。

＜ロビー　舞台手話通訳ご案内＞



＜ロビー　字幕機器　貸し出し＞

＜カフェ　コミュニケーションボード＞

＜舞台手話通訳　左：田中結夏　右：江副悟史＞

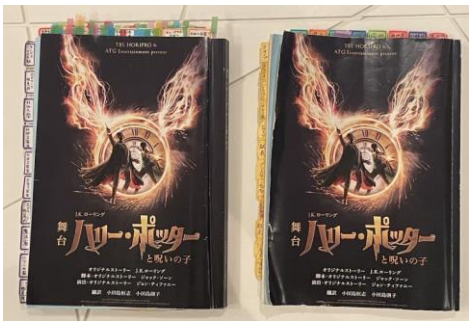
■舞台手話通訳について

本作の舞台手話通訳付き公演の実施が決まったのは2024年7月。その後、舞台手話通訳を務める田中結夏さん、江副悟史さん、手話監修の森田明さんと打ち合わせを重ね、台本をお渡ししてから約3か月の準備・稽古を経て、本番を迎えました。

舞台手話通訳は、講演会等の通常の手話通訳とは表現方法が異なり、登場人物の性格や雰囲気、演技を手話通訳に反映させることが求められます。ただ台詞を手話で表すだけだと伝わらないため、観客が感情移入できるような表現の工夫が必要なのです。すべての台詞を訳すと時間が足りない場合は、複数人のシーンにおいて、その中の1人のセリフの通訳に絞りながら、話している相手のセリフを受けているようなリアクション等も取り入れる「ミラー通訳」という手法を使うことも。

また、役の名前についても、指文字で表現するだけではなく、役によってはサインネーム（手話で表現するあだ名）を決めています。例えば、ハリー・ポッターは額の傷を表すような仕草がサインネームです。主要な人物のサインネームを決めるのにも一苦労です。さらに本作では、魔法や、架空の物の名前が多数登場するため、それらの表現をどのようにするかなど、検討を重ねました。

5月からは通し稽古を何度も実施し、本番に備えていただきました。



台本には多数の付箋と書き込みがあり、努力の跡が垣間見えます

観劇したお客様からは、「臨場感があって楽しめた」、「字幕機器だけだと感情を追えないので、舞台手話通訳のおかげで感情移入できた」、などの感想が寄せられました。

■舞台手話通訳者　コメント

田中結夏　（舞台手話通訳者・手話通訳士・俳優。これまでにミュージカル『SIX』、ミュージカル『アニー』、等、20作品以上の舞台手話通訳を担う。

本作品の舞台手話通訳付き公演は日本では前例がないため、それぞれのキャラクターのサインネーム（手話で表現するあだ名）や、劇中で使用される固有名詞、呪文等のより良い表現を求めて、ペアである江副さんや手話監修の森田さんと共に何度も検討を重ねました。お客様の「ハリー・ポッター」シリーズの知識量には個人差があるので、マニアの皆様も初見の皆様にも楽しんでいただけるような翻訳のレベル感をチーム内で一致させることも重要なポイントでした。

作品や出演者の皆様を好きになっていただきたい一心で通訳しているので、お客様のこれからの観劇体験に繋がるきっかけになればとても嬉しいです。2025年に入ってからは舞台手話通訳付き公演をご覧くださるお客様の人数自体が圧倒的に増えたことを実感じ、背筋の伸びる思いでいっぱいです。引き続き、より良い舞台手話通訳のかたちを追求し、お客様に心から作品を楽しんでいただけるようなアクセシビリティとなるよう、一つ一つ課題と向き合ってまいります。

江副悟史　（俳優。日本ろう者劇団代表。株式会社エンタメロード代表取締役）

「ハリー・ポッター」はファンが多いので、呪文はどう表現するのか、それぞれのキャラクターをどう演じていくのか、本作品ならではの名言（教訓）もきちんと解釈を理解し、どう手話で表現していくか、田中さんと監修の森田さんと一緒にかなり悩みました。
準備がとても大変だったので、終えた時はまず、「はぁ…楽しかったぁ」と思いました（笑）

お客様から多くの拍手をいただいた時は、舞台関係者皆の、「ろう者のお客様にも楽しんでもらいたい」という思いが一つの形になったことを実感し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今年、大きな舞台で相次いで舞台手話通訳が実現し、ろう者のお客様から「楽しかった！」「手話で見て楽しめるっていいね！」などの言葉を頂けて、幼い時、「（ろう者が）もっと楽しめる時代がいつか来ると信じて」と励まされた記憶を思い出しました。

まだ障がいのある観客が100％楽しめる時代とは言えないと思いますが、ようやくスタートラインに立てたかなと思います。